

学生の声**「わからないことはひとにききましょう。」**

工学研究科 電気工学専攻 小林研究室 博士後期課程2年 山本 詩子

今の研究を始めてから早3年が過ぎた。短かったようで長かった3年間。私は成長できたのだろうか。希望的観測が多分に含まれているが、研究について何も知らなかった頃よりは成長できているはずだ。しかし自分に自信が持てるほどには成長していない。自分が凡人であることは分かりきったことだが、あえて自分の無能さを嘆く気はない。ではどうすれば同じ時間をかけてもっと大きく成長できたのか。この3年を振り返ってみると一番の原因は、研究を遂行する上でわからないことについて周りの人に聞いて来なかったことだと思う。きっと忙しいだろうから私なんかの用事で時間を取らせてはいけない。こんなことぐらい自分で調べたら分かるはず。自分で調べて分かることを人に聞くなんて申し訳ない。今更こんなことを知らないなんて恥ずかしい。こういうことを気にしすぎていた。もちろん自分で調べることが成長のために時には大切だと思う。しかし全くわからないことを自分で調べるのはとても長く時間がかかる。同じことを人に聞いたら10分の1も時間がかからずに解決することもある。同じ時間で10倍知識の幅が広がるなら、人から少しの時間を頂いて聞いた方がいい。私の知識はまだまだたいしたことはないけれど、自分が聞かれる立場になって知ったことは、自分が知っていることを人から聞かれて教えられるのは案外嬉しいものである。自分もわからないことを一緒に考えるのも楽しい。そういえば塾講師をしていたときは生徒に教えるのがあんなに楽しかった。自分が人に聞く立場になったとき、どうしてその気持ちを忘れてしまったのだろう。勉強や研究を進めて時間が経てば経つほど、聞ける人は減り聞ける立場でもなくなり人に聞くことに対してますます抵抗が大きくなってしまう。気軽に聞ける人がいるうちに、わからないことは人に聞きましょう。私ももう少し勇気を出して、わからないことを積極的に人に聞ける人になろうと思う。そうすればこれからは、もう少し成長できる気がする。

「社会で通用する人材になれ」

情報学研究科 通信情報システム専攻 高橋研究室 博士後期課程2年 横田 健治

京都大学は非常に優秀な先生方や学生に恵まれており、研究を行うための環境は十分に整っているといえます。学生はその中に身を置くだけでも、世界に通用する最先端の研究が行えるのですが、やはり大学の外の社会の動向を知ることが大切だと思います。例えば、大自然に恵まれた山の中でも、池の水は放置しておくとも時間と共に汚れていくのに対し、川の水は常に流動することで澄んだ状態が保たれます。これと同じように、人も同じところに留まっていると墮落していき、新しい環境に触れることでモチベーションを向上させることができます。

大学の外に触れる機会を得るには、企業のインターンシップに参加する、海外の大学へ留学する、といったことが挙げられます。私は企業のインターンシップに参加した経験があり、大学の研究室とは違う雰囲気を感じることができました。企業の研究者は仕事の対価として給料をもらっており、責任感があり自分の仕事に誇りを持っているように感じました。一方、私の研究室の学生には主体性に欠けており、周りに流される毎日を過ごしているように感じます。私自身も、インターンに参加するまではそのような学生と同じような状態だったので、外を知ることによって初めて自分の置かれている環境を見つめ直すことができました。

もちろん、大学には企業にはない魅力的な部分がたくさんあります。学術的な基礎研究ができること、自分のやりたい研究に専念できること、利益に縛られることがないこと、などが挙げられます。しかし、研究を続けるためには、研究費を獲得する必要があります。それは大学においても例外ではなく、競争的資金という名のもとに、優れた研究に対して資金が重点的に割り振られるようになっているのです。そのため、自己満足で終わらないような、社会で認められる魅力的な研究が求められます。特に博士後期課程の学生は、ひとつの研究分野に対する専門性だけでなく、社会を牽引するビジネスリーダーになり得る資質が必要だと思います。それがあれば、どのような社会でも通用する人材になれるはずです。